令和３年８月２２日（日）
第３９回県南四歯科医師会合同学術研修会
ベルフーガ（足利市永楽町 8-2）

今こそ知りたい！　口腔がん

―歯科医院で救える命がある―

東京歯科大学口腔顎顔面外科学講座
柴　原　孝　彦

昨年２月、元アイドルの口腔がんカミングアウトは歯科界に激震を与えました。前年の夏から口内炎を自覚し、治療をかかりつけ歯科医に委ねたところ、ステロイド軟膏の処方、さらにレーザー照射を繰り返していたとのこと。褥瘡性潰瘍または慢性再発性アフタならば適切な治療となりますが、口腔がんや前がん病変（現在では口腔潜在的悪性疾患）であれば病態はさらに悪化しがん化へと進展させます。口内炎発症から約半年が経過し、基幹病院で『舌がんステージⅣ』と診断されました。一般開業歯科医院の対応に問題ななかったでしょうか？口腔粘膜はどのように変化していったのでしょうか？

今回の講演では、この辺にフォーカスを当て解説を試みたいと思います。口腔粘膜の組織から病理まで、臨床症状とも併せ多くの口腔粘膜病変を診ていただきます。特に初期の口腔がんは、他の粘膜病変と鑑別が難しいことがあります。なかでも難治性歯周病と初期の歯肉がんは酷似しています。経過を診ていい粘膜疾患なのか、潜在的に悪性化能をもった病変なのか見抜くことも重要です。

一般的に診察にあたっては経験に基づいた視診と触診が基本ですが、最近のトピックスとして初心者にも判断が可能な蛍光装置による粘膜観察があり、口腔がんのみならず潜在的悪性能の判断も可能となりました。この機器のご紹介もしたいと思います。

「一口腔単位を守るのは歯科医の責務」この矜持を抱いていただける明日の診療に役立つ講演を企画します。